

## 特別展示

### 「外交史料にみるオリンピック」について

二〇二一（令和三）年、東京でオリンピック、パラリンピックが開催された。これを記念して、日本とオリンピックとの関わり、特に一九六四（昭和三九）年に東京でオリンピックが開催されるまでの歴史を紹介する特別展示を企画した。当初は、オリンピック開催期間に合わせての開催を予定していたが、緊急事態宣言の発令により、七月二日から臨時休館となったため、急遽、展示内容をホームページで紹介することとした。その後、緊急事態宣言が解除され、一〇月一日（翌年一月二六日）の期間、別館展示室で特別展示を開催した。

本特別展示の展示史料解説は以下の通り。また、外交史料館ホームページ内のコンテンツ「過去の特別展示・企画展示一覧」でも、展示内容を紹介している。

○外交史料館HP「過去の特別展示・企画展示一覧」

<http://www.mofa.go.jp/mofai/annai/honsho/shiryo/archive.html>  
#sections



### 「外交史料にみるオリンピック」〈展示史料解説〉はじめに

二〇二一（令和三）年夏、東京でオリンピック、パラリンピックが開催されました。東京でオリンピックが開催されるのは一九六四（昭和三九）年以来五七年ぶりになります。

東京でのオリンピック開催は、戦前期から日本人の夢でした。本展示では、一九世紀末に近代オリンピックが開催されるようになって以降の日本とオリンピックとの関わり、特に一九六四年に東京でオリンピックが開催されるまでの歴史を、外交史料館所蔵史料を通して、ご紹介します。

本展示により、オリンピック、パラリンピックへの理解が深まることを期待するとともに、スポーツを通じた国際交流、平和構築について考えていただくきっかけとなれば幸いです。

## I 近代オリンピックとの出会い

## § 近代オリンピックとクーベルタン

一八九六(明治二九)年四月、ギリシャの首都アテネで第一回オリンピックが開催されました。現在まで続く近代オリンピックの第一回大会を実現させたのは、フランス人のピエール・ド・クーベルタンでした。普仏戦争(一八七〇年〜七一年)に敗れて沈滞ムードが蔓延していたフランスの状況を打開するために、クーベルタンは世界各国の教育現場を視察しました。そしてイギリスのパブリックスクールの学生たちが積極的、かつ紳士的にスポーツに取り組み姿を見て感銘を受けました。また、当時発掘されたオリンピック遺跡にも刺激を受け、スポーツ教育の理想形として「古代オリンピックの近代における復活」、スポーツの国際交流による世界平和の実現を思い描くようになりました。

こうして、一八九四(明治二七)年、パリの万国博覧会に際して開かれたスポーツ競技者連合の会議において、クーベルタンはオリンピック復興の意義を説き、同会議において、第一回オリンピック大会をアテネで開催することが決定されました。

## § 第一回オリンピックアテネ大会との関わり

アテネ大会に日本人競技者は参加していませんが、前年の夏、オリンピックに日本陸軍から銃器を出展してもらえないか、という依頼が

ギリシャから寄せられました(展示史料一)。第一回オリンピックでは、射撃競技が開催されることになっており、これにあわせて、ギリシャの射撃委員会が、各国の様々な銃を集めて展示することを企画したためです。

この要望に応じ、陸軍省は、村田連発銃一挺、擬製実包三〇発を出展しました。第一回アテネ大会に、日本は銃器の出展という形で関わりました。

## 【展示史料一】一八九五(明治二八)年八月二六日

## 第一回オリンピックアテネ大会と日本の関わり

加藤高明(かとう・たかあき)駐英公使から西園寺公望(さいおんじ・きんもち)外務大臣臨時代理宛の公信。オリンピックへの銃器出品につき、駐英ギリシャ公使から依頼があったことを伝えたものです。

## § 嘉納治五郎の国際オリンピック委員会(IOC)委員就任

一九〇八(明治四一)年、クーベルタンは、ジェラルド駐日フランス大使に、国際オリンピック委員会(IOC)の日本代表委員の選定を依頼しました。ジェラルド大使は、講道館柔道の創始者であり東京高等師範学校(現在の筑波大学)校長でもある嘉納治五郎(かのう・じごろう)が適任であると考えました。そこで、ジェラルド大使は、嘉納を委員として推薦しても構わないか、小村寿太郎(こむら・じゅたろう)外務大臣宛に文書を送りました(展示史料二)。これを受け、

外務省は文部省にも問い合わせを行った上で、差し支えない旨をジェラール大使に回答しました。

一九〇九（明治四二）年のＩＯＣ総会で嘉納は日本人初（アジア人としても初）のＩＯＣ委員に選出されました。

**展示史料二** 一九〇九（明治四二）年一月一八日

国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）委員に嘉納治五郎推薦につき照会

嘉納をＩＯＣ委員に推薦して差し支えないか、ジェラール大使が小村寿太郎外務大臣に照会した文書です。

§ オリンピックへの初参加

ＩＯＣは一九一二（明治四五）年にストックホルムで開催されるオリンピックへの日本の参加を嘉納に勧めました。これを受け、嘉納は一九一一（明治四四）年に国民体育の普及とオリンピックへの参加を担う組織として大日本体育協会を設立しました。そして翌年、三島弥彦（みしま・やひこ）、金栗四三（かなくり・しそ）の二名が日本人選手として初めてオリンピックに出場しました。

短距離の三島は一〇〇メートル、二〇〇メートル予選最下位、四〇〇メートルは予選通過したものの疲労のため準決勝を棄権しました。また、マラソンに出場した金栗は日射病のため倒れてしまい、意識が戻った時にはすでにレースは終了していました。

このように、初めての参加は満足いく結果とはなりませんでしたが、

国際的なスポーツ大会への日本の初参加として、大きな一歩となりました。

嘉納は次の大会に備えて、国内で陸上大会と水泳大会を開催し、日本人選手の実力を上げていくこととしました。一九一六（大正五）年の大会は第一次世界大戦により中止となりましたが、一九二〇（大正九）年のアントワープ大会では、テニス競技で初の銀メダルを獲得しました（男子シングルの熊谷一弥〔くまがい・いちや〕、男子ダブルスの熊谷、柏尾誠一郎〔かしお・せいいちろう〕が獲得）。

**展示史料四** 一九一二（明治四五）年七月二七日

ストックホルム大会の景況報告

内田定槌（うちだ・さだつち）駐スウェーデン公使が送付したストックホルム大会の報告書です。大会には二六か国、約二三〇〇名の参加があったことがわかります。また、添付されたエントリー表には、日本人二名がエントリーしていることが記載されています。

§ オリンピックに出場した外交官

一九二四（大正一三）年のパリ大会には、当時、駐英大使館に勤務していた岡崎勝男（おかざき・かつお）という外交官が出場しています。岡崎は、東京帝国大学在学中から陸上競技で好成績を残しており、外務省入省後も極東選手権競技大会等に出場していました。オリンピックでは、五〇〇メートルに出場し、予選第一組で二位という成

績を残しています。同大会と一緒に出場した選手には、金栗四三や一九二八(昭和三)年の阿姆斯特ダム大会で日本人初の金メダリストになった三段跳びの織田幹雄(おだ・みきお)がいました(展示史料五)。

なお、岡崎はその後、外交官としてのキャリアを重ね、一九四五(昭和二〇)年九月の第二次世界大戦の降伏文書調印式には重光葵(しげみつ・まもる)外務大臣等とともに日本側代表団の一員として出席しています。また、一九五二(昭和二七)年から一九五四(昭和二九)年には外務大臣を務めました。



岡崎勝男  
1897年～1965年

#### 展示史料五 一九二四(大正一三)年四月一日

##### オリンピックに出場した外交官岡崎勝男

大日本体育協会から外務省情報部宛に送られた出場予定選手に関する報告文書です。選手リストには、岡崎の他、金栗四三や織田幹雄の名前が見られます。

#### § 冬季オリンピックへの参加

一九二八(昭和三)年二月には、スイスのサンモリッツで第二回となる冬季オリンピックが開催され、スキー競技に日本から六人の選手

が出場しました。これが冬季オリンピックへの日本の初参加となりました。

#### 展示史料七 一九二八(昭和三)年二月

##### 第二回冬季オリンピック大会プログラム

#### § 人見絹枝の活躍

また、同年の五月から八月にかけて、阿姆斯特ダムにおいて夏季オリンピックが開催され、人見絹枝(ひとみ・きぬえ)が日本人女子選手として初めて出場しました。

同大会には四三名の日本人選手が参加しましたが、女子選手は陸上競技に出場した人見一人でした。人見は女子の個人種目すべてにエントリーし、八〇メートルで銀メダルを獲得しました。

女性がスポーツをすることが珍しい時代にあって、女子選手への偏見も厳しい中、人見は海外スポーツ事情の紹介、後進の育成、生涯スポーツの重要性についての普及啓発などを精力的に行い、今日の女性スポーツの礎を築きました。

#### 展示史料六 一九二六(大正一五)年八月三〇日

##### 国際女子競技大会での人見の活躍を伝える電報

永井松三(ながい・まつぞう)駐スウェーデン公使から幣原喜重郎(しではら・きじゅうろう)外務大臣宛の電報です。一九二四(大正

一三）年にイエーテポリで開催された国際女子競技大会での人見の活躍を伝えています。人見は「競技場裡ノ寵児」となり多くの拍手を受けました。また、その「飾ラズ乱レザル態度」が日本人選手の評価を高めたと記されています。なお、本電報の発信者である永井は一九三九（昭和一四）年にI O C委員に就任しています。

### コラム 嘉納治五郎 「日本オリンピックの父」

嘉納治五郎は一八六〇（万延元）年に生まれ、東京帝国大学を卒業後、学習院教授等を経て、一八九三（明治二六）年、東京高等師範学校（現在の筑波大学）校長に就任し、日本の学校教育の充実、体育・スポーツの発展に尽くしました（三期二三年半在任）。

また、柔道の創始者としても知られる嘉納は、柔道を通して、事実を観察する科学的な態度、正義感、公正さや謙虚さを身につけるとともに、修行で得たことを社会生活に生かしていくことを説きました。この「精力善用・自他共栄」の理念を胸に、嘉納は自ら世界各国を飛び回り、柔道の実践と理念の普及に努



嘉納治五郎(1860年～1938年)  
出典：国立国会図書館HP  
「近代日本人の肖像」

めました。また、他者に誠実に尽くしてこそ、自身も自国も繁栄するという信念から、多くの中国人留学生を受け入れ、近代中国の教育の基盤となる人材を育成しました。

このような嘉納の理念は、スポーツを通じて人格を形成し、相互交流を行うことで親善を深め、世界平和を構築するというオリンピック精神とも合致したため、嘉納は日本におけるオリンピック普及に尽力しました。嘉納は、欧米のI O C委員たちからも尊敬を集め、「青年の真の教育者」「スポーツ教育の総合的人格者」と評されました。

### 【展示史料三】 一九一〇（明治四三）年七月二二日

#### イタリアからの柔道教師招聘希望に対する嘉納治五郎の書簡

一九一〇年、イタリアから柔道教師招聘の希望が寄せられたため、外務省は嘉納治五郎に候補者の推薦を依頼しました。本史料はそれに対して、嘉納が外務省通商局長宛に送った書簡で、二名の候補者が挙げられています。

この時は調整がつかず、招聘は見送られたようですが、一九二八（昭和三）年に嘉納がイタリアで柔道の実演と講演を行うと、イタリアでは柔道が盛んになりました。現在においてもイタリアスポーツ教育協会では、「精力善用・自他共栄」という嘉納の教育理念を生かしたスポーツ教育が実践されています。

## II 幻の東京オリンピック

### § オリンピック招致活動

ここまで見てきたように、一八九六(明治二九)年に始まった近代オリンピックは、次第に国際的なイベントとしての形を整えていきました。また、日本国内でも、日本人の活躍やその報道もあいまって、オリンピックに対する関心が高まっていきました。

こうした状況の中、一九三一(昭和六)年一〇月、東京市議会は皇紀二六〇〇年に当たる一九四〇(昭和一五)年開催の第一二回オリンピック大会の東京招致を満場一致で決議しました(皇紀とは、神武天皇が即位したとされる西暦紀元前六六〇年を元年として数えたものです)。翌一九三二(昭和七)年六月には、永田秀次郎(ながた・ひでじろう)東京市長名で斎藤実(さいとう・まこと)外務大臣に書簡が送られ、外務省に対し、東京開催への協力が要請されました。この書簡には、東京での開催は皇紀二六〇〇年の絶好の記念となるのみならず、国民の体育教育にも有益であり、また外国人の日本への理解と関心を一層深めることにつながると記されています(展示史料八)。

【展示史料八】 一九三二(昭和七)年六月一〇日

### オリンピック招致活動協力依頼

永田秀次郎東京市長から斎藤実外務大臣宛の文書で、オリンピック東京招致のため、外務省に協力を依頼したものです。

### § 杉村陽太郎駐イタリア大使の交渉

東京市からの要請等を受け、外務省はその後、関係方面への協力要請や情報収集に努めました。特に嘉納治五郎の弟子で、IOC委員も務めていた杉村陽太郎(すぎむら・ようたろう)駐イタリア大使は、イタリア首相であったムッソリーニに働きかけて、有力な開催候補地であったローマを辞退させ、逆に東京への支持を取り付けるなど、オリンピック誘致に向けて積極的な活動を展開しました(展示史料九)。こうした諸方面の努力が実を結び、一九三六(昭和一一)年七月三十一日、ベルリンで開催されたIOC総会において対立候補であったヘルシンキを破り、第一二回オリンピックの東京開催が決定しました。

【展示史料九】 一九三五(昭和一〇)年二月八日

### 杉村大使とムッソリーニ首相の会見に関する報告

杉村陽太郎駐イタリア大使から広田弘毅(ひろた・こうき)外務大臣宛の電報です。



杉村陽太郎(1884年～1939年)

出典：国立国会図書館  
「近代日本人の肖像」

### § 戦争によるオリンピック返上

開催決定後、国内では大会組織委員会を設置するなど準備が進められました。しかし、一九三七（昭和一二）年七月の盧溝橋事件勃発以降、日本に対する国際的な批判の高まりを背景として、東京でのオリンピック開催に反対する動きが各国で強まっていきました。

一九三八（昭和一三）年四月には、IOC会長のバイエラトゥールが来栖三郎（くるす・さぶろう）駐ベルギー大使を訪問し、中国と戦争中の日本でオリンピックを開催することに反対の意見が多く、ボイコット国が多数出ることも懸念されるため、日本の面目のためにもオリンピック開催を辞退するように勧めました（**展示史料一〇**）。また、国内からも、現在は物心両面で国の総力を挙げて戦局に対処すべきであるとして、オリンピック開催に反対する声が高まっていました。こうした国内外からの反対を受けて、一九三八（昭和一三）年七月一日、日本政府は東京での開催を取り止めるのが適当であると大会組織委員会に到達し、翌一六日に大会組織委員会は「国策二順応シ報國ノ誠ヲ致スベキヲ信ズ」との声明文を発表して、東京大会開催返上を決定しました。

これを受け、東京に代わって



幻の1940年東京オリンピック公認マーク

ヘルシンキが第二回大会開催都市となりましたが、ソ連のフィンランド侵攻によりヘルシンキ大会も中止となり、さらに、一九四四（昭和一九）年の第一三回ロンドン大会も第二次世界大戦により中止となりました。

#### **展示史料一〇** 一九三八（昭和一三）年四月五日

##### IOC会長からのオリンピック開催辞退の勸奨

来栖三郎駐ベルギー大使から広田弘毅外務大臣宛の電報です。

#### **展示史料一一** 一九三八（昭和一三）年七月一六日

##### オリンピックの開催を中止する旨の声明書

東京市オリンピック委員会が発出した声明書です。オリンピック史上初となるアジアでの大会開催の機会を失うことは遺憾ではあるが、時局に鑑み、「国策二順応シ報國ノ誠ヲ致ス」ために開催を中止する。しかし、近い将来平和が回復することを信じ、次の大会を東京に誘致すべく万全の努力を払うとし、「将来ノ支援ヲ懇請シテ止マサルナリ」と文書を結んでいます。

#### コラム 平沢和重 嘉納治五郎を看取った外交官

オリンピックの東京開催を訴えるため、一九三八（昭和一三）年にカイロで行われたIOC総会に出席した嘉納治五郎は、帰国途中の船

内で死去しました。同じ船に乗り合わせ、嘉納の最期を看取ったとされるのが、外交官の平沢和重(ひらさわ・かずしげ)でした。平沢は戦後NHKの解説委員に転身し、一九五九(昭和三四)年のIOC総会で一九六四(昭和三九)年東京オリンピック開催立候補趣意説明を行いました。趣意説明の中で、平沢は、日本の小学六年生の教科書に『五輪の旗』というエッセイが掲載されていることを紹介し、日本では、小学校の時からオリンピック精神やオリンピック・ムーブメントについて学習し、深く理解していることをアピールしました。平沢の簡潔でわかりやすいメッセージはIOC委員たちの心を動かし、オリンピックの東京招致に大きく貢献しました。

後に、平沢は、東京招致の基礎固めは戦前の嘉納らの働きによるものであったと振り返っています。一九四〇(昭和一五)年の東京オリンピックは幻に終わりましたが、彼らの思いは受け継がれ、一九六四(昭和三九)年の東京オリンピック開催へとつながっていました。



平沢和重  
(1909年～1977年)

**【展示史料一二】** 一九三八(昭和一三)年六月九日  
平沢和重から須磨弥吉郎宛書簡

一九三八年に駐米大使館勤務を終え、米国から日本に帰国した平沢が、米国勤務時代の上司の須磨弥吉郎(すま・やきちろう)に宛てた

書簡です。書簡には、米国内で悪化する対日感情への対応策や在米の大使館・各領事館間での連絡制度設立等を外務省情報部に対し提言していることが記されています。後にNHK解説委員に転身する平沢が外務省でも情報の収集・発信に関する政策に取り組んでいたことが窺えます。

### Ⅲ 東京オリンピック一九六四

#### § オリンピックの再開

一九三六(昭和一一)年のベルリンオリンピック以来、戦争により一二年間中断していたオリンピックは、一九四八(昭和二三)年のサンモリッツ冬季大会、ロンドン夏季大会から再開されました。しかし、戦争の影響で日本に対する負の感情がIOC内で強く、日本の参加は認められません。そこで、オリンピックとほぼ同じ日程で水泳と陸上の日本選手権が国内で開催されることとなりました。この時、水泳一五〇〇メートル自由形で古橋広之進(ふるはし・ひろのしん)が出した記録は、未公認ながらロンドン大会の優勝タイムはもとより、当時の世界記録を二一秒八も短縮する記録で、多くの日本人に勇気を与えました。

#### § 国際社会への復帰とオリンピック再招致活動

一九五一(昭和二六)年九月、日本はサンフランシスコ平和条約に

調印し、翌年四月の同条約発効により、完全な主権を回復し、国際社会に復帰しました。オリンピックへの参加も、一九五二（昭和二七）年二月にオスロで開催された冬季大会から認められました。

そして、オリンピック復帰と同時期に、東京都はオリンピック再招致のための活動を始めました。平和条約発効直後の同年五月にはオリンピック招致を公式に表明し、「平和回復のなつた文化国家日本の真姿をスポーツを通じて世界に認識させるとともに国際信義と友愛の確立をめざし」、同年七月、一九六〇（昭和三五）年の第一七回オリンピック大会の開催地に正式に立候補しました。

ただ、一九五六（昭和三一）年のオリンピックがオーストラリアのメルボルンで開催されることとなっていたため、二回連続して非ヨーロッパ地域でオリンピックが開催されることは難しく、一九五五（昭和三〇）年のＩＯＣ総会では、一九六〇（昭和三五）年大会の開催地としてローマが選ばれました。

東京都はただちに一九六四（昭和三九）年の第一八回大会招致を目標とし、そのために、一九五八（昭和三三）年に東京で開催される予定であったアジア競技大会にあわせてＩＯＣ総会を東京に招致することとしました。そして、アジア大会にあわせて、明治神宮外苑に国立競技場を建設するなど、整備を進め、ＩＯＣ委員に東京が国際競技大会を開催するのに十分な能力があることをアピールしました（**展示史料一四**）。

また、その後も各国のＩＯＣ委員に開催地として東京を選んでもら

うようにアピールを続けました（**展示史料一五**）。特に、米国のデトロイト市が開催地への立候補を表明すると、中南米の票が重大な鍵を握るとみた東京オリンピック準備委員会は、ロサンゼルス在住の日系二世のフレッド・イサム・ワダ（和田勇）を招致使節として派遣することとしました。ワダは、一九四九（昭和二四）年の全米水泳選手権に日本選手が派遣された際に自宅に選手を宿泊させて以来、私財を投じて日本選手をサポートしてきた人物で、この時も中南米九か国を歴訪して東京招致を訴えました（**展示史料一七**）。

こうして臨んだ一九五九（昭和三四）年ＩＯＣ総会で、五六票中三四票を獲得し、一九六四（昭和三九）年大会の開催都市は東京に決定しました（**展示史料一八**）。

**展示史料一三** 一九五三（昭和二八）年一月二三日

**第一七回オリンピック大会東京招致につき協力依頼**

東京都が外務省に対し、アジア各都市でのアピールを依頼した文書です。

**展示史料一四** 一九五八（昭和三三）年五月

**第三回アジア競技大会に関する資料（競技場地図、参加国国旗等）**

**展示史料一五** 一九五八（昭和三三）年七月

**第一八回オリンピック大会東京招致に関する協力依頼について**

岸信介(きし・のぶすけ)東京オリンピック準備委員会会長等から藤山愛一郎(ふじやま・あいichろう)外務大臣宛の文書です。オリンピック開催に対する日本の熱意と準備を各国に強く示し、日本に対する理解と好意を一層高めるために、在外公館職員に対し、IOC委員等との個人的友好関係の維持強化、招致活動に関する情報提供、準備委員会から各国へ派遣する代表者に協力すること等が依頼されています。なお、岸は当時の総理大臣です。

**展示史料一六** 一九五八(昭和三三)年一月一日作成

**第一八回オリンピック競技大会開催希望都市に対する質問書への回答書(案)**

立候補都市は、IOCが定める一四項目の質問事項への回答書の提出が求められました。本史料は東京都がIOCに提出した回答書の案及び附属史料です。競技種目や日程、運営組織、競技施設、財政、宿泊体制、都市の人口、気候、重要国際行事の開催経験有無等について記載されています。東京大会から正式種目となった柔道は、本案では、デモンストレーション種目とされています。回答書の提出期限は二月一日となっていました。東京都は事故による未着・遅延の可能性を考慮して、東京都からの発送とは別に外務省からもIOC本部(ローザンヌ)に発送することを希望しました。

**展示史料一七** 一九五九(昭和三四)年四月一八日

イサム・ワダ(和田勇)による招致活動についての報告  
駐チリ大使から藤山愛一郎(ふじやま・あいichろう)外務大臣宛の電報で、チリでの招致活動の様子を報告したものです。

**展示史料一八** 一九五九(昭和三四)年五月二七日  
オリンピック東京大会開催決定に関する感謝電報

本史料は、オリンピック東京招致に大きく関わり、開催決定後にオリンピック組織委員会事務総長を務めた田畑政治(たばた・まさじ)が藤山外務大臣宛に送った謝意電報です。藤山大臣に感謝するとともに、中南米票の確保のために尽力したワダ氏に感謝電報を送ることを依頼しています。

\*田畑政治は、オリンピックをテーマとした二〇一九年大河ドラマ「いだてん」の主人公の一人です。

§東京オリンピック一九六四の開催

一九六四(昭和三九)年一月一日、東京オリンピックが開幕しました。史上初のアジアでの開催でした。

大会開催に先立って実施された聖火リレーにおいて、ギリシャで採火された聖火は、アジアの一一の都市を経由し、九月七日に沖縄に到着しました。当時、沖縄は米国の施政下にありましたが、日本の一員として東京オリンピックの感動を分かち合いたいと多くの沖縄の人々が願い、「オリンピックの聖火リレーを沖縄へ」という希望が沖縄か

ら日本体育協会へと繰り返し伝えられたことから、「日本の最初の着陸地」を沖繩とすることが、聖火リレー特別委員会において決定していました。

その後、聖火は日本各地の都市を巡り、一〇月一〇日、オリンピック開会式で国立競技場の聖火台に灯されました。大会には、九三か国五一五二名の選手が参加し、一五日間にわたって熱戦が繰り広げられました。東京大会では、柔道、バレーボールが正式競技となりました。同競技のほか、男子体操、レスリング、ボクシング、ウエイトリフティングで日本選手は金メダルを獲得しました。メダル獲得数は、金一六・銀五・銅八の計二九個で、アメリカ、ソ連に次いで日本は第三位となりました。

**展示史料一九** 一九六四（昭和三九）年

オリンピック聖火空輸機の着陸都市図表

**展示史料二〇** 一九六四（昭和三九）年

オリンピック東京大会 開閉会式実施要項

本史料には、開閉会式の式次第、実施要領、運営組織図、係員の任務等が記載されています。開会式の選手団入場行進は、歩度二二〇、歩幅七五cmとされています。また、聖火入場と聖火台への点火の際には、場内に香をただよわせる演出が予定されていたことがわかります。

**§ パラリンピックの開催**

東京オリンピック閉幕後の一月八日からは、パラリンピックが開催されました。「パラリンピック」という言葉は、脊髄損傷等による下半身麻痺者という意味のパラプレジア (Paraplegia) とオリンピック (Olympic) を合わせた造語ですが、この大会から広く使用されるようになりました（現在は、「もうひとつの (Parallel) オリンピック」という意味で使用されています）。

パラリンピックの前身となったストーク・マンデビル競技大会は、第二次世界大戦で負傷した軍人たちの精神的・肉体的リハビリを目的としてイギリスで始まった競技会でした。

日本でも、整形外科医の中村裕（なかむら・ゆたか）が、イギリスのストーク・マンデビル病院のグッドマン博士の元で、リハビリにスポーツを取り入れる方法を学び、帰国後に身体障害者のスポーツ振興と社会的自立に熱心に取り組みました。

東京パラリンピックは、脊髄損傷による車椅子使用者を対象とした第一部と国内の身体障害者スポーツ大会（視覚・聴覚障害者等を含む）である第二部の二部構成で行われました。

第一部には、二一か国から三七八名の選手（うち日本選手五三名）が参加し、日本は卓球男子ダブルスC級で金メダルを獲得しました。日本のメダル数は、金一、銀五、銅四の計一〇個で、一三番目でした。また、第二部は、沖繩代表も含めた四八一名の選手と特別参加の西ドイツ選手六名で行われました。

外国人選手が明るく生き生きとスポーツを楽しむ姿は、障害者福祉の重要性を広く伝えるとともに、障害者の社会的自立支援の必要性を認識させることになりました。

**【展示史料二】** 一九六四(昭和三九)年一月  
パラリンピック(一九六四)のリーフレット等の広報資料

### むずびにかえて

ここまで、一九世紀末にオリンピックが復興されてから、一九六四(昭和三九)年に東京でオリンピック、パラリンピックが開催されるまでの日本とオリンピックとの関わりを見てきました。

近代におけるオリンピック・ムーブメントは、スポーツを通じた人格教育、スポーツを通じた国際交流による世界平和の実現というクーベルタンの夢から始まり、その理想に共鳴した世界各国の人々により、次第に大きな広がりを見せました。日本では、嘉納治五郎を中心としてオリンピックの理念の普及がなされ、それはまた、東京大会招致活動へとつながっていきました。

彼らが一度は手にした東京オリンピック開催の夢は戦争により中止に追い込まれましたが、オリンピックへの思いは途切れることはなく、戦後、日本が国際社会に復帰すると同時に、東京オリンピック再招致活動が開始されました。それは、平和を回復した日本の姿を国内外に

示すものでした。そして、実現した東京オリンピック、パラリンピックを通して、戦争で傷ついた多くの人々が勇氣や希望を与えられました。

オリンピックの理念の根幹には平和の思想があります。今夏の東京二〇二〇大会でも、国連総会において、大会開催期間中のオリンピック休戦決議が採択されるなど、平和の重要性を世界に呼びかける取組が行われています。

本展示を通し、五七年前に人々が熱狂した東京オリンピックに至るまでの歩みを振り返るとともに、スポーツを通じた国際交流や平和構築の意義を改めて考えていただければ幸いです。

### 主要参考文献

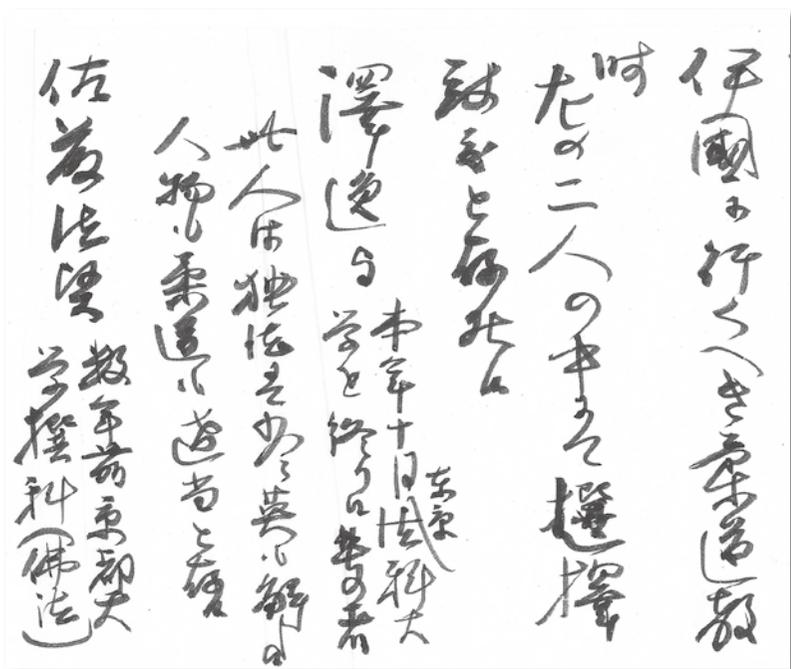
〈図書等〉

- 岡崎勝男『戦後二十年の遍歴』(中央公論新社、一九九九年)
- 後藤光将編著『オリンピック・パラリンピックを学ぶ』(岩波書店、二〇二〇年)
- 真田久『嘉納治五郎 オリンピックを日本に呼んだ国際人』(潮出版社、二〇一八年)
- 浜田幸絵『東京オリンピックの誕生 一九四〇年から二〇二〇年へ』(吉川弘文館、二〇一八年)
- 石出法太ほか著『これならわかるオリンピックの歴史Q&A』(大月書店、二〇一六年)
- 弁本直文監修『写真で見るオリンピック大百科』二(ポプラ社、二〇一三年)

生誕一五〇周年記念出版委員会編『気概と行動の教育者 嘉納治五郎』（筑波大学出版会、二〇一一年）	（外務省記録）※展示順
東京都（東京都公文書館）編『都史資料集成Ⅱ』第七卷（東京都〔東京都公文書館〕、二〇一八年）	51.518 「希臘国雅典典二於テ開会ノ「オリンピック」競技会ヘ本邦武器出品一件」
昭和館学芸部編『日本のオリンピック・パラリンピック〜大会を支えた人々〜』（昭和館、二〇一九年）	29.126 「万国体育会議雑件」
東京二〇二〇オリンピック競技大会公式ウェブサイト ( <a href="https://olympics.com/tokyo-2020/ja/">https://olympics.com/tokyo-2020/ja/</a> )	310.227 「学術教育関係雑件」第一卷
日本オリンピック委員会ホームページ ( <a href="https://www.joc.or.jp/">https://www.joc.or.jp/</a> )	11.12.09 「国際「オリムピック」競技大会一件」第一卷
日本パラリンピック委員会ホームページ ( <a href="https://www.jsador.jp/paralympic/jpc/">https://www.jsador.jp/paralympic/jpc/</a> )	311.59 「運動及体育関係雑件」第二卷
筑波大学ホームページ「嘉納治五郎」 ( <a href="https://www.tsukuba.ac.jp/about/outline-identity/kano/">https://www.tsukuba.ac.jp/about/outline-identity/kano/</a> )	11.12.09-1 「国際「オリムピック」競技大会一件 本邦大会関係」第二卷、第五卷
国立国会図書館電子展示会「近代日本人の肖像」 ( <a href="https://www.ndl.go.jp/portrait/">https://www.ndl.go.jp/portrait/</a> )	1.110.04.5 「国際オリンピック大会関係 第一七回ローマ大会（一九六〇）」第一卷（MF NO. I-0118）
内閣府「男女共同参画白書 平成三〇年版」特集 スポーツにおける女性の活躍と男女の健康支援	1.110.05-1 「アジア・オリンピック大会関係 第三回東京大会関係（昭三三、五）」（MF NO. I-0122）
( <a href="https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h30/zentai/html/honpen/b_1_s00_00.html">https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h30/zentai/html/honpen/b_1_s00_00.html</a> )	1.110.04.6-1 「国際オリンピック大会関係 第一八回東京大会（一九六四）招致決定関係」第一卷、第二卷（MF NO. I-0119）
沖縄県公文書館ホームページ 過去の展示会「一九六四年 沖縄を駆けぬけた聖火リレー」	1.110.04.6-16 「国際オリンピック大会関係 第一八回東京大会（一九六四）参考資料」（MF NO. I-0122）
( <a href="https://www.archives.pref.okinawa.jp/event_information/past-exhibitions/929">https://www.archives.pref.okinawa.jp/event_information/past-exhibitions/929</a> )	1.110.04.6-2 「国際オリンピック大会関係 第一八回東京大会（一九六四）組織委員会 参考資料」第三卷（MF NO. I-0120）
	1.110.04.6-11 「国際オリンピック大会関係 第一八回東京大会（一九六四）聖火リレー関係」（MF NO. I-0121）
	1.110.04.6 「国際オリンピック大会関係 第一八回東京大会（一九六四）」第四卷（MF NO. I-0119）
	1.110.01 「体育並に運動競技関係」第一卷（MF NO. I-0114）

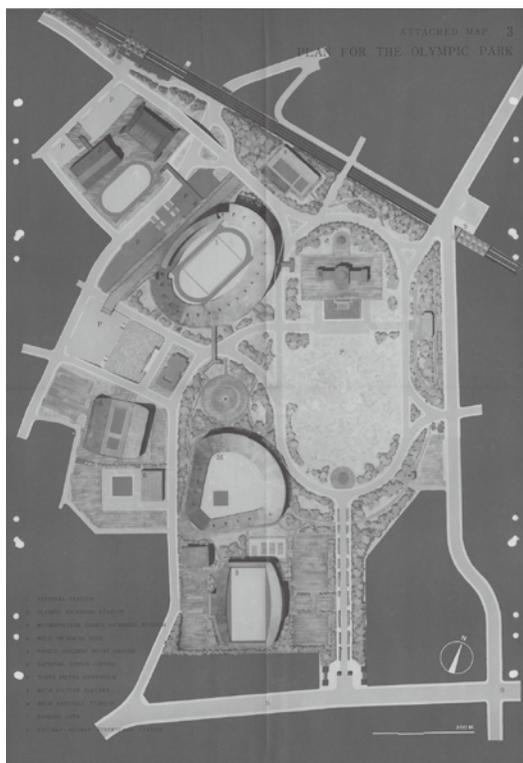
展示史料三

イタリアからの柔道教師招聘希望に対する嘉納治五郎の書簡  
(画像は一部抜粋)



展示史料一六

会場計画図(第一八回オリンピック競技大会開催希望都市に対する質問書への回答書(案)より)





## 特別展示「外交史料にみるオリンピック」関連年表

年	出来事
1892 明治25	クーベルタンがソルボンヌ大学での講演でオリンピック復興の構想を表明
1894 明治27	パリで開催されたスポーツ競技者連合の会議でオリンピックの復興と国際オリンピック委員会(IOC)設立が決定
1896 明治29	アテネで第1回オリンピックが開催される 各国武器の展覧会を開催するため、駐英ギリシャ公使が加藤高明在英公使を通じ、帝国陸軍に銃器の出品を依頼。村田連発銃1挺と擬製実包30発を陸軍から送付
1909 明治42	駐日フランス大使を通じ、嘉納治五郎に対し、クーベルタンからのIOC委員推薦の知らせが届く。嘉納治五郎が日本人初(アジア人としても初)のIOC委員に就任
1912 明治45	第5回ストックホルム大会開催。日本人2名が初めて参加
1913 大正2	第1回極東選手権競技大会(東洋オリンピック)開催(於: マニラ)
1920 大正9	第7回アントワープ大会開催。日本人初のメダル獲得(テニス男子シングルス、ダブルス)
1924 大正13	第8回パリ大会開催。外交官の岡崎勝男が出場
1926 大正15	国際女子競技大会において人見絹枝が活躍
1928 昭和3	第9回アムステルダム大会開催 日本人初の金メダル獲得(男子三段跳びの織田幹雄、200m平泳ぎの鶴田義行) 日本人初の女子選手人見絹枝が銀メダル獲得(800m走)
1931 昭和6	満州事変
1932 昭和7	東京市、第12回オリンピック大会開催候補地に立候補 第10回ロサンゼルス大会開催。西竹一(バロン西)の活躍(馬術)
1934 昭和9	満州国問題により、極東オリンピック協会解消
1935 昭和10	杉村陽太郎駐イタリア大使がムッソリーニ首相と会見。オリンピック東京開催の支持をとりつける
1936 昭和11	IOC総会において第12回オリンピック大会の東京開催が決定 第11回ベルリン大会開催 日本人女子選手として前畑秀子が初の金メダル獲得(女子200m平泳ぎ)
1937 昭和12	日中戦争(～1945年)
1938 昭和13	東京オリンピック開催中止
1941 昭和16	太平洋戦争(～1945年)
1945 昭和20	ポツダム宣言受諾。降伏文書調印
1951 昭和26	サンフランシスコ講和条約調印(1952年4月発効)
1952 昭和27	東京都議会、第17回オリンピック大会東京招致を決議 東京都、第17回オリンピック大会開催の正式招請状をIOC本部に手交
1955 昭和30	IOC総会において第17回オリンピック大会のローマ開催が決定
1956 昭和31	第16回メルボルン大会開催。期間中に開催されたIOC総会で1958年のIOC総会東京招致に成功
1958 昭和33	第3回アジア競技大会開催。期間中にIOC総会開催。東京招致をアピール 第18回オリンピック大会開催候補地に正式立候補
1959 昭和34	IOC総会において、第18回オリンピック大会の東京開催が決定
1964 昭和39	聖火リレー沖縄からスタート(9月7日) 東京オリンピック開催(10月10日～10月24日) 東京パラリンピック開催(11月8日～14日)

※本展示で関連史料を展示している出来事に色をつけています。